

篠原徹編

『近代日本の他者像と自画像』

菊地 暁

「玉石混交」「呉越同舟」「暗中模索」「五里霧中」。世に共同研究の成果なる書物は数多あれども、その「共同」性なるものの内実はいかなるものであり、その「成果」は書物のうちにいかに結実されているのだろうか。というのは一般論を述べたまでのこと、これから始まる書評に対する先回りの言い訳である。篠原徹の編になる九論文を収めた本書は、時間的には考古学的過去から現在まで、空間的には「大日本帝国」の諸地域をカバーし、そこで組上に載せられるのは民族学（文化人類学）、民俗学、歴史学、考古学といった学問諸分野、さらには植民地統治、教育、文化財保護、優生といった政策的諸分野である。これらの多様な対象・主題を一人の評者がそれぞれの文脈に即して論じることが、不可能とはいわぬものの、相当に困難なことは明らかだろう。以下の書評が、本書の編者や執筆者の期待する土俵とは、必ずしも一致しないことを予めお断りしておきたい。

まず本書の概要を紹介しておこう（以下、引用は頁数のみ表

記）。

本書の企図は、その基となった科研プロジェクトの題目「国民国家形成過程における日本人の自己認識と他者認識——民俗学と民族学を中心に——」に端的に示されている。日本において現地調査を基軸に据えた学問は、日本の「内」を対象とする「民俗学」と「外」を扱う「民族学」とに分節化されている。なにゆえ等しくフィールドワークを根幹とする学的営為が、一方は自己認識の学として措定され、他方は他者認識の学という役割を割り振られることとなったのか。そこには、近代日本の国民国家形成におけるユニークな条件が反映されており、また、そのような条件の形成に二つの学問分野から何らかの関与がなされたことも想定される。学問の再編が内外から叫ばれる現在にあたり、二つの「ミソクガク」の来歴を社会的文脈を踏まえて再考することは、両学問の可能性を探るばかりでなく、今後の「日本（人）」の自己認識・他者認識のあり方にもながしかの示唆を与えうるはずである。このような関心に導かれた当プロジェクトには二つの柱が設定されている。ひとつは、学史の再検証により「人種」「民族」「国民」「文化」「常民」「民俗」の対象化とその近代的再編を踏づけること、いまひとつは、国民国家形成と植民地状況の関連性を考察することである。篠原の次の言葉がこのプロジェクトのマニフェストとなるだろう。

「日本の内と外をめぐる認識史は、民俗学と民族学がそれぞれ個別に試みてきている。しかし、この研究では、両者の相補性と同時性に着目する。そして、いままでもあまり試みてこられなかったが、対象と視線において『国家の次元』を導入して、内にあつ

ての地方の創出と国民形成、外にあつての植民地域の創出と国家形成の過程が、それぞれ学問認識と結ぶ相互関係に注目してみたということである（一七一—一八）。

各論文の紹介に移ろう。第一部「植民地という表象」は、小熊英二「金閨丈夫と『民俗台湾』——民俗調査と優生政策」、本名瀬高嗣「アイヌ『滅亡』論の諸相と近代日本」、中村淳「（土人）論——『土人』イメージの形成と展開」の三論文を収めている。

小熊論文は、雑誌『民俗台湾』を手がかりに、植民地状況で政治権力、研究者、被植民者の三者が繰り広げる一筋縄ではいかなる関係性の照射を試みる。「やりたかつたこと」と「やってしまつたこと」が食い違ふのは人の常だが、植民地状況における調査研究にはとりわけこのことが当てはまる。純粹な学術的関心による調査が政治権力によつて統治のために利用されることもあるれば、その逆に、被植民者の政治的抵抗を鼓舞することもあるだろう。調査者が何らかの政治的意図を抱く場合もあるが、それとてその成果に直裁に反映されるとは限らない。形質人類学者・金閨丈夫に主導された『民俗台湾』はまさしくそのようなケースである。戦時下台湾で漢人社会の慣習調査を押し進めた『民俗台湾』は、皇民化政策に抵抗し台湾人の文化的自立を称揚した金閨らのヒューマニズムとして評価される一方、逆にその活動に通底する植民者と被植民者の非対称な関係性を前提したエキゾチズムや植民地支配との共犯関係を批判もされている。この相反する評価を小熊は次のように止揚する。民族学的素養を備えた金閨は、台湾人の慣習研究が優生政策の一環となることを認識し、そのための調査を構想していたが、『民俗台湾』にその意図を表明すること

はなく、また当時の調査能力が政策的要請を満たさなかつたため、植民地統治への実質的貢献はなかつた。しかも、その活動に文化的ナショナリズムのはけ口を求めた台湾人が参加したことは事実であり、そのことが戦後台湾において「ヒューマニズム」評価へと結びつく。こうした『民俗台湾』をめぐる多様な主体の交錯と分裂した評価のあり方は、「他者への理解と表象が行なわれるさうに発生するデイスコミュニケーションの深さ」（四八）を示している。小熊は指摘する。

本名瀬論文は、近代日本において反復された「滅びゆくアイヌ」という語りの歴史化を試みる。社会進化論という「科学」の相貌を備えた「優勝劣敗」のレトリックは、「保護」という名目の下にアイヌの支配を可能とし、同時に、その学術研究をも正当化していった。この「滅亡」論は、明治初期、モースら外国人研究者によつて研究される「対象」だった「日本人」が、そのあいまいな外延を実体化させ、研究する「主体」へと転換するために呼び出されたキー・ストーンだった。やがて「保護」政策の進展とともに、アイヌの創り上げた遺産を「文芸」として称揚し記録するとともに、そこで展開された日常的な支配の実践を切斷・隠蔽する「文学化」された「滅亡」論が登場する。総力戦期には、植民地拡張にともなう「混血」の進行という同時代的課題を受け、「混血」化による「日本人」への「同化」進化を意図する優生政策的「滅亡」論が登場、そのレトリックは、アイヌ自身の運動においても共有され、そのことが「滅亡」論を強化し「国民」的な物語へ押し上げることとなつたと指摘している。

中村論文は、「日本人」にとつて決して「身近」とはいえない

〈土人〉の存在が、いかにイメージ形成されたかという問題を、国語辞典、国定教科書、学会誌論文タイトル等の博搜から追跡した労作である。〈土人〉という言葉のそもそもの意味は「土地の人」というものであり、明治大正期における〈アイヌ〉イメージの普及が「未開人・野蛮人」という含意を与えていったという。台湾の〈蕃人〉イメージの浸透が、その〈土人〉のレファラントを南洋群島、アフリカ、アメリカなどへと拡張させていく。国定教科書においても教化の対象たる〈土人〉は常に国家の周縁部に見出され、植民地の拡張によって新たな周縁部に新たな〈土人〉が見出される傾向が指摘できるという。いずれにしろ、近代日本に〈土人〉にまつわる具体的情報が乏しかったことは否めず、その乏しい情報を提供したのが民族学であり、それに基づいてステレオタイプを刷り込んだのが教科書というメディアだった、という見通しを中村は提示している。

第二部「国民国家の内と外」は、高木博志「陵墓の近代——皇霊と皇室財産の形成を論点に」、宇田川洋「鳥居龍蔵・千島アイヌ・考古学」、小松和彦「南洋に渡った壮士・森小弁——『南洋群島』以前の日本・ミクロネシア交流史の一断面」の三論文を収めている。

高木論文は、日本国家を象徴する存在であり続けている「天皇制」に「陵墓」からアプローチする。近代日本は、国宝・史跡などの国民に公開される「開かれた」文化財と、御物・陵墓などの皇室に私有される「秘匿された」文化財という二系統の制度をもつという。前者が西欧諸国とパラレルなものに対し、後者は日本の固有性を強調する。幕末から明治にかけて陵墓は、天皇制を視覚

化する装置としてはやくから整備が進められ、その際、近世には仏教的穢れの觀念から忌避された墓所は、慶応四年閏四月七日「山陵御穢の審議」を経て「御霊の宿る聖域」へと転換される。戦後の皇室改革は、陵墓のあり方にも変更を迫ったが、国有財産でありながら運用面は戦前と連続する「皇室用財産」という制度の導入により、陵墓は現在に至るまで「秘匿された」文化財であり続けている。「外庄」に弱い政府に陵墓を学術資料として公開させるためには、陵墓の「世界文化遺産」化という方法もあり得るのではないかと高木は提案している。

宇田川論文は、鳥居龍蔵によりアイヌの下位集団として分類されたいわゆる「千島アイヌ」を考古学的に再考する。そもそも「アイヌ」と呼ばれる集団の中には自称を異にするさまざまな集団が含まれており「千島アイヌ」もその一つである。宇田川は、内耳土器、内耳鉄鍋、有孔円板、回転式離頭鉢、毒窩形式矢尻、魚鉤、チャシなどの遺物・遺跡・民族資料の分布から、捉捉島までが北海道と同一文化圏にあったと推定する。さらにその周辺には「環オホーツク海古代文化」とでも称すべき広大な類似文化圏が広がっており、鳥居のいう「千島アイヌ」の所属は、「アイヌ」という概念とそれに加えて「環オホーツク海古代文化」を遺した集団概念の中から引き出せる」という「希望的観測」（一八七）を示している。

小松論文は、どちらかといえば日本人の意識に上ることの少ない「南洋」が、いかに表象され、いかなる現実の交流をみたかという問題を、漫画「冒険ダン吉」のモデルといわれる壮士・森小弁を通して光りを当てる。近代日本がまがりなりにも「南洋」を

意識するに至ったのは小笠原領有問題が契機だという。日本の南に広がる「南洋」は、統治者にとって余剰人口の移植先として認識され、民間にも「南進論」の気運が高まっていく。こうした時代にトラック諸島に渡った森は、当初はその「征服」を夢見たが、島の複雑な政治状況を熟知するにつれその不可能を悟り、首長の娘を娶るなど次第に現地社会への関与を深めていく。商人、軍師として現地社会に貢献するとともに、島を訪れる日本人（軍人、学者など）の「手先」も務めた森は、昭和二〇年、七十五歳の生涯を終える。島の集会所の破風板には、日本人壮士らしき人物が島民を働かせ、結果的には島民が勤勉で幸福になった、という物語が描かれていた。小松はここに単純な支配と抑圧には還元されない帝国日本と南洋群島の微妙な関係を見出している。

第三部「民俗学・民族学の他者」は、清水昭俊「日本における近代人類学の形成と発展」、岩本通弥「『民族』の認識と日本民俗学の形成——柳田国男の『自民族』理解の推移」、島村恭則「『日本民俗学』から多文化主義民俗学へ」の三論文を収めている。

清水論文は、近代日本における人類学という学問分野の展開を政治状況との関係性において通史的に展望する。日本人類学史は戦前の植民地人類学と戦後のグローバル人類学とに大別されるという。坪井正五郎らの努力により西欧から移入された人類学は、西欧から観察される対象だった「日本人」が自ら観察する主体へと展開する試みであり、オリエンタリズムの枠組みに規定されていた。植民地の拡大と平行して次々と現地調査を実施した鳥居龍藏は、人類学の重心を現地調査へと移行させるとともに、それに基づき各地域の研究を基礎づけた。やがて、大正期から昭和初期

にかけて民俗学との共同を経て人文科学へと接近した人類学は、昭和九年の日本民族学会設立によって制度的独立を果たす。総力戦期における植民地・占領地域の拡大は研究者を否応なくフィールドへ連れ出すとともに、民族政策に協力すべく国立民族研究所をはじめとする組織的強化が岡正雄を中心に押し進められる。こうした植民地人類学の展開は、敗戦とともに烏有に帰すこととなり、人類学の再建が開始される。その「名誉回復」を担ったのが治安維持法による検挙歴をもつ石田英一郎というキャラクターであり、植民地下の調査成果を当時の植民地状況から切断して評価するという彼の判断である。この時期、戦前期の調査成果の整理、国内調査、戦争中に途絶えていた欧米理論の紹介、大学における制度的基盤の整備、等々が着々と進められ、やがて高度成長にともなう経済発展は日本人を再び世界各地のフィールドへと送り出し、現在では世界でも有数の規模を誇る人類学界が形成されている。日本の人類学は、旧宗主国の人類学や旧植民地の人類学とも異なる特異なタイプを形成しており、そのユニークさは今後のユニバーサルな人類学に向けての積極的な可能性を秘めていると論じている。

岩本論文は、国民国家論との関連で賞賛と非難の相半ばする柳田国男の思想と方法を、テキスト内在的に捉え返そうとする試みである。柳田の初期の議論が日本国内における異民族を視野に収めていながら、その後、いわゆる「一国民俗学」の形成にあたってその存在を学的対象から遠ざけていったことは周知の通りである。このことを村井紀は「南島イデオロギー」論において、法制官僚として植民地統治に関与した経歴の隠蔽として解釈したが、

岩本はこれを事実関係から遊離した批判として徹底的に退ける。

柳田の方法は、膨大な観察事実の集積から帰納される法則性の発見という手続きを踏まえており、それは自説の改廃をも辞さないリゴリズムに貫かれているという。一見イデオロギー的に映る稲作農耕民への偏重も、椎葉村の旅を通じて「経済学以外の理法」によって米を栽培する人々を発見したことから導き出されたものであり、「沖繩」を包含し「アイヌ」を排除したのも同様の方法的手続きの結果だという。戦後の「稲の産屋」論における自説の変更も、新たな観察事実を踏まえたためであり、その学的リゴリズムを今一度真摯に受けとめる必要があると岩本は主張する。

島村論文は、民俗学に向けられた国民国家イデオロギーやコロシアムとの共犯関係への批判を克服すべく「多文化主義民俗学」を提唱する。島村によれば、稲作農耕民の研究に偏重した日本民俗学を脱構築する可能性は、坪井洋文の「日本民俗の多元性」論、野口武徳の漂海民研究、山口麻太郎らの地域民俗学などによってその萌芽を見せたものの、いずれも最終的には「日本人」の実定性に回収されてしまったという。それゆえ、「人類文化としての伝承（主として非文字知）を、性、階層、集団、地域、個人などのあらゆる差異、多様性に着目し、そこにおける差異の政治力学・文化の政治性に十分注意をはらって考察しようとする、新たなパラダイム」が要請されるという（二三三）。具体例として、下関市における〈在日コリアン〉の日韓二つの国家にまたがった生活世界、そして彼（女）らを取り巻く日本人をも含み込んだ新たなコミュニケーションのあり方が紹介され、今後ますますグローバル化する世界において、その多様で流動的な生活実践を捕捉し

うる多文化主義民俗学への希望を表明している。

以上、本書の概略をまとめてみた。評者の不案内なトピックもあり、また紙数も限られたため、各論文の論旨をどこまで忠実に再現できたか心許ない点もないではないが、一応の紹介となったことと期待する。

ようやく文字通りの書評を始められる段に至った。紙数も残り少ないので手短かにいこう。本書を通読して評者が感じた唯一にして最大の疑問は、本書は、果たして序章で提起された課題にどのように応えたのか、という点だ。繰り返しになるが、その課題は、近代日本の他者認識と自己認識の具体例として、民族学と民俗学という二つの学問分野の形成と展開を、その同時性と相補性に着目しつつ、国民国家形成や植民地状況という「国家の次元」を踏まえて跡づけることだったはずである。

まず分りかたねたのは、この課題に対して各論考にいかなる役割が与えられたかである。どうひっくり返しても民族学・民俗学と絡みそうにない高木論文はとりあえず置いておく。上記の課題に最も直接的に込めているのは、清水論文による日本人類学史だろう。これに対応すべき日本民俗学史の役割を割り振られたのが岩本論文、島村論文と思われるが、前者は柳田の思想と方法の検証にとどまり、民俗学にとって柳田がいかに大きな存在であれ、それをそのまま民俗学史とみなすわけにはいかない。しかも、岩本論文が「日本人」を対象化した「国民民俗学」への展開を経験的事実に依拠した学说的リゴリズムの帰結とするのに対し、島村論文が、酒井直樹の所論を引きつつ「日本人」は経験科学が「経験」しうる対象ではないと論じる時、両方を読む読者は、民俗学

がいかなる「民族」概念に依拠してどのような学的実践を展開してきたのか、その通史的展望に思い至るのは甚だ困難なことだろう。日本と南洋群島の関係を一個人の生活史から照射した小松論文も、上記の課題に則るなら、そのことと後の人類学調査との関連性なり比較なりの議論が欲しいところだ。宇田川論文も同様である。さまざまな資料から（土人）像をあぶり出した中村論文も、上記の課題との関連性を鑑みたとき、必ずしも直接的な主題設定とはいえないだろう。台湾を扱う小熊論文やアイヌを扱う木名瀬論文があるなら、そのカウンターパートとして朝鮮、沖縄を主題化する論考も欲しいところである。誤解のないように繰り返すが、評者はここで各論考それぞれの学問分野における学的達成について述べているのではない。各論考は、それぞれに興味深い主題に興味深いアプローチを展開している。ただ、それがまとまった時「チーム」として何を目指しているかが不明確だということを描いているのである。

また、学史の再検討を通じて「人種」「民族」「国民」「文化」「常民」「民俗」等の概念を再考するという課題も序章で述べられているが、これもいかなる達成が得られたのか不明である。そもそも、各論考においてこれらの概念が明確に定義されることがないばかりか、各執筆者はそれぞれ異なる概念に依拠して論を展開しているように見受けられる。一例を挙げれば、考古・民族資

料の分布から民族集団の同定を試みる宇田川論文と、明治期に「日本人」を実体化させる反措定として「アイヌ」が着目されたと論じる木名瀬論文とは、依拠する「民族」あるいは「人種」の概念に相当な隔たりが感じられる。学史の再検討を通じて概念の再考とは、その学史の「最末端」に位置する自らの依拠する概念の再考をも伴わなければならないはずである。

さらには、「同時性と相補性」への着目も、各論考によって実現のされ方に相当の開きが感じられる。各論考はそれぞれ「内」「外」のいずれかを扱う場合が多く、その結果、いかなる「同時性と相補性」が見出されたかは序章でも明確にされていない。「内」を扱うと「外」が疎かになり、「外」を扱うと「内」が見

えなくなる、という近代日本の自他認識を覆ったアポリアは、その超克を試みた本書においても果たされなかったというべきか。もちろん、編者や執筆者たちが提起した課題の大きさを思う時

本書にその全ての解答を求めるのがそもそも無理なことは、評者も重々承知している。編者・篠原もいうように「問題の大きさを改めて痛感」（二一）する他はない。その意味で、「他者への理解と表象が行なわれるさいに発生するデイスコミュニケーションの深さ」（四八）という言葉は、なにより先に共同研究のメンバー自身に向けられるべき言葉なのかもしれない。

（B5判 三四七頁 二〇〇一年五月 柏書房 二八〇〇円）